

鶴田浩二の唄

灰田 勝彦

昭和二十四年京都下鴨作品の「恋愛三羽鳥」で鶴田浩二という人間と仕事をしたのが、兄弟分のチギリ¹を結ぶに及んだソモソモの縁であった。当時別に特筆大書する程のものは感じられなかったが、たゞこの男、俺の好きな事は何でも好きな奴だナ、又ヒドク歌の好きな奴だ、と云う印象は強く残っている。

「恋愛三羽鳥」の中で唄った歌に僕の兄の作った「アロハ東京」というワルツの曲がある。これを当時ヒドク気に入っていた様だった。好きなだけあって歌を覚えるのは実に早かったけど、覚えるまではワンカット終る度毎に「もう一度願います」という風に実に熱心だった。内心この分で行くとゆく末は今に俺の生活権をオビヤカス事になりはしないかと一寸心配して今教えた分返せせと云い度い位だったが、案の定ビクター入社と同時にヒットにヒットを重ね、今では押も押されもしないレコード界の重鎮と化してしまった。

昔ヒットというのは十萬枚以上を指したものだ。小唄勝太郎の「島の娘」の如きは八十萬枚というベラ棒な数字さえ示したのもあった。現在では二萬枚からヒットの部類に入るのであって、事実戦前と現在との差は実に大きな開きがある。理由としてレコードの生産能力が低下した訳ではなく、一番大きな原因は全国的に見て蓄音機を所有している家庭が戦争で激減したため、レコードがあっても発音装置の蓄音機がないというのが実情である。やや専門的な事を付け加えたが、然らば二萬枚位なら誰れでも出せる事だろうと誰れでもが想像するだろうけど、なかなかそうは問屋がおろさないのである。然らば何故問屋がおろさないかと、又一寸学のある処を見せ度いけれど書かんとするネライと紙面の関係で省く事にする。

さて吹き込めば必ずヒットを出すというレコード界のニューフェイス鶴田浩二がどうしてそんなにヒットが出るか、多角的にメスを入れてみたところ結局熱心という二字に尽きるという結論が出た。

即ち彼の吹込みを見ていると、先ずハンケチで鉢巻をして乱れ勝ちな髪と心を引き締め、マイクロフォンに向っている。右手を右耳に当てて²伴奏の音楽と自分の口から出る声を最大漏らさず自分の耳に集めて多少高潮した面持で歌っている。しかもその歌の雰囲気ですっかり溶け込んでしまった如く軽く眼を閉じて歌っている。相当慣れた人でも矢張りマイクに向うと多少上り気味になるのが常で、譜面に全神経を集中して唄うというのが普通の人の場合である。

僕などは軽く眼を閉じてなどという離れ業は到底出来ない事で、この小さなマナコをパッチリ見開らいてただヒタスラ熱心に全神経を楽譜に集中させて気分なんか考えているヒ

¹ 灰田勝彦よりみると鶴田浩二は東富士、別所毅彦に次ぐ三人目の義兄弟

² 「左手を左耳に」か？

マなく唄ってしまう。しかし浩ちゃんは、吹込みの時はいつもその唄をすっかり暗記して 100%自分のものにして軽く眼をとじ充分気分を出して唄っている。

新曲を吹き込むのに楽譜を離れて唄う事はなかなか素人が考える程簡単なものではない。文句を間違わないかとか、唄っている間も心配で心配で気分どころではないけれど、浩ちゃんはこの点いつも実に自信タップリだ、本当に羨しい位だ。この自信はひとえに十二分な勉強から来るものであるが、あの忙^{せわ}しい男がよくもあんなに勉強出来るナ、と驚きもし感心もしている次第だ。

今や浩ちゃんはビクターになくってはならない存在になってしまった。これから僕はいつスランプになっても構わない、それはいつも出れば必ずヒットを出してくれるピンチヒッターを得たからだ。

本当のところ浩ちゃんはとてもマイクにも慣れたし歌も上手くなった。

彼は低音部にとても魅力があつて僕は好きだ。だから作曲者に出来るだけ低音部を生かす様に注意している。

ビング・クロスビーはセイサンカリを盛ってやり度い位ニクイ程ウマイ歌手だ。

弟よ、これ以上上手くならなくてもいゝぞ！ あまりウマクなられると、どうしても僕は野球選手に転向したくなってくるんだよ。

少しホメすぎたかな。